

福
住
構
遺
跡

福住構遺跡

—一般県道山下飾東線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

兵庫県文化財調査報告
第419冊

平成24(2012)年3月
兵庫県教育委員会

兵庫県教育委員会

加西市

ふく すみ かまえ
福 住 構 遺 跡



平成 24(2012)年 3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は兵庫県加西市福住町所在の「福住構遺跡」（ふくずみかまえ　いせき）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 福住構遺跡の全面調査は、一般県道山下節東線道路改良事業に伴い、兵庫県社土木事務所・加西事業所（当時）の依頼によって、平成11年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（当時）が実施した。
3. 本報告書作成にかかる整理作業は、兵庫県北播磨県民局加東土木事務所の依頼を受けて、平成23年度に兵庫県立考古博物館が実施した。
4. 本報告書掲載の地形図は、第1図は加西市教育委員会提供のものを基にした。第2図は国土地理院発行のものを基とした兵庫県教育委員会発行「兵庫県遺跡地図」を基に作成した。図版1は旧社土木事務所加西事業所作成のものを使用した。その他の実測図は調査担当者および嘱託職員によるものを使用した。
5. 遺物写真は㈱地域文化財研究所に撮影を委託した。航空写真は国土地理院発行のものを使用した。
6. 本報告書は、高瀬敬子の補助の下、別府洋二が編集した。
7. 発掘調査、整理作業に際して以下の方々の指導・助言を受けました。記して感謝いたします。（順不同、敬称略）
立花　聰、永井信弘、森　幸三、松岡千寿、水口富夫

目 次

第1章 調査の経緯	1
第2章 遺跡周辺の環境	5
第3章 遺構	9
第4章 遺物	13
第5章 まとめ	19

挿図目次

第1図 播磨國加西郡賀茂村ノ内福住村全圖	2
第2図 福住構遺跡の位置と周辺の遺跡	7

表目次

表1 福住構遺跡出土遺物一覧表	17・18
-----------------------	-------

図版目次

図版1	調査位置
図版2	遺構配置及び西壁土層断面
図版3	堅穴住居址 S H 1
図版4	堅穴住居址出土土器 1
図版5	堅穴住居址出土土器 2
図版6	包含層出土土器 1
図版7	包含層出土土器 2
図版8	出土石器

写真図版目次

写真図版1	航空写真	写真図版9	出土遺物2
写真図版2	遠景	写真図版10	出土遺物3
写真図版3	全景	写真図版11	出土遺物4
写真図版4	全景	写真図版12	出土遺物5
写真図版5	水田址	写真図版13	出土遺物6
写真図版6	堅穴住居址	写真図版14	出土遺物7
写真図版7	堅穴住居址他	写真図版15	出土遺物8
写真図版8	出土遺物1	写真図版16	出土遺物9

第1章 調査の経緯

第1節 分布調査

兵庫県社土木事務所（当時）による一般県道山下篠東線道路改良工事が加西市域において計画された。この道路は、加西市山下町と姫路市篠東町を結ぶ県道であるが、狭小であるため拡幅等の改良工事が暫時計画されている。同事業における兵庫県姫路土木事務所管内では、姫路市篠東町小野原において平成4年4月に分布調査（遺跡調査番号920114）が実施されているが、埋蔵文化財は確認されていない。

社土木事務所管内の加西市域における同事業に伴う分布調査（遺跡調査番号940075）は福住町および東剣坂町の範囲で、平成6年4月に実施され、延長約2kmの範囲内の2地点で須恵器などの散布が認められた。両地点の間は建物や資材置場となっていたため調査不能であったが、両地点を含めた一連の遺物散布地として取り扱われることとなった。当初、No.1地点とされていた東半部では奈良時代の須恵器を主とした土器が散布しており、西半部では中世前後の須恵器が採集されている。

第2節 確認調査

分布調査の結果を受けて、平成11年5月に一部の確認調査（遺跡調査番号990074）がおこなわれ、福住丘陵から下って丘陵裾に沿って西に延びる範囲で、多くの遺物を含む遺物包含層や遺構が確認された。

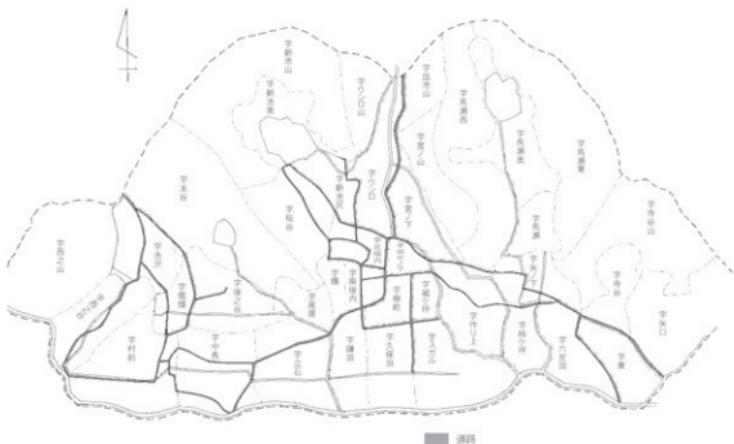
従前の知見では、このあたりに埋蔵文化財が存在しないことになっており、当時の加西市教育委員会発行の『遺跡分布図』においても遺跡の記載はない。これは、遺跡の立地条件に適した地形にある福住町の集落内で発掘調査が行われたことがなく、集落より一段低い周辺のは場整備事業の調査結果によるためであり、今回の調査によって新たな知見が得られたことになる。

いっぽう、福住町（旧加西郡賀茂村内福住村）の小字名を調べると、淨土真宗善称寺を中心に「構」があり、その北側に「北垣内」、東側に「南垣内」と記され、丘陵地から南西に延びる張り出しには中世後半期の居館が存在したことが想定される。現在の福住町の集落内を県道と平行して位置する道は、おおむね旧地形に沿ったものであり、L字形に曲がる不自然なカーブは「構」の範囲と無関係ではないだろう。このように考えると、現福住町集落の下には、大規模な遺跡が存在すると考えられる。

今回調査をおこなった現在の県道は、旧道に沿っており、調査地は、小字名では「鎌田」「柳町」を通過しているが、一部が、「構」から南西に張り出した地形の末端部にあたっていると考えられる。

「構」が中世後半期に存在したと考えると、今回の本発掘調査では、この周辺にそれよりも古い時期の集落があったことが明らかとなった。

なお、遺跡の名称は、遺跡の範囲や性格から判断して、「福住・構遺跡」と呼称するのが適当と考えられたが、その後県教育委員会発行の兵庫県遺跡地図などで遺跡名の錯綜が生じたことから、報告書作成にあたって、加西市教育委員会との協議を経て「福住構遺跡（ふくすみかまえいせき）」とすることになった。



第1図「播磨國加西郡賀茂村ノ内福住村全圖」

この確認調査によって、造構や遺物包含層が確認された範囲の全面調査は、平成11年10月（遺跡調査番号990227）に実施している。

その後も同事業における福住構遺跡の確認調査は、断続的に実施されている。本発掘調査部分の北側では、平成13年11月（遺跡調査番号2001171）及び、平成14年10月（遺跡調査番号2002152）に確認調査が実施され、一部に遺物包含層が確認されたものの、造構は検出されなかった。遺物包含層や造構は、北側の微高地部分の県道周辺では失われており、すでに削平されたものと判断され、本発掘調査には至らなかった。

第3節 本発掘調査

本発掘調査（遺跡調査番号990227）は、平成11年10月の実働8日間で実施された。

同年5月に実施された確認調査（遺跡調査番号990074）によって、造構や遺物包含層が検出された範囲の調査で、県道が大きく西に曲がる南側拡幅部及び直進部分との接合部の約175mが本発掘調査対象となった。

本発掘調査は、周辺の耕作状況や本体工事の予定により、社土木事務所が本体工事の中に含めて発注し、直接執行の形態を執って実施された。調査途中に雨に降られるなどの困難があったが、社土木事務所および本体工事担当者等の協力により短期間で調査を完了することができた。この調査によって、多くの遺物が含まれる遺物包含層と、その下層では水田址や堅穴住居址などが確認され、これまで知られていなかった遺跡の様相の一部が明らかとなった。

前述のように、この本発掘調査後にも福住構遺跡の同事業による確認調査は実施されたが、新たな本

発掘調査は実施されてはいない。

福住構遺跡の同事業に係る調査担当者等は以下のとおりである。

分布調査（遺跡調査番号 940075）

担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山上雅弘、所崎明雄
期間 平成6年4月19日
調査面積 約20.000m²

確認調査（遺跡調査番号 990074）

担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 水口富夫、松岡千寿
期間 平成11年5月11日
調査面積 約24m²

全面調査（本発掘調査）（遺跡調査番号 990227）

担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 別府洋二
期間 平成11年10月18日～28日
調査面積 約175m²

確認調査（遺跡調査番号 2001171）

担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 種庭淳介、上田健太郎
期間 平成13年11月6日
調査面積 約 8 m²

確認調査（遺跡調査番号 2002152）

担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 渡辺 昇
期間 平成14年10月16日
調査面積 約12m²

第4節 整理作業

平成23年には、兵庫県加古郡播磨町大中の県立考古博物館および明石市魚住町の魚住分館にて出土遺物の水洗い・ネーミング、接合・補強、復元や遺物実測・写真撮影、トレース、レイアウト等の整理作業を行い、報告書を作成した。

整理作業 平成23年度

担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
調査第2課 別府洋二
整理保存課 村上泰樹、鎌宮 正、山本 誠、深江英憲、岡本一秀

水洗い・ネーミング： 西口由紀、小林陽子

接合・補強： 篠子ふさ恵、三好綾子、奥野政子、藤尾裕子、嶺岡美見、

吉村あけみ、佐々木愛、平宮可奈子

復元： 島村順子、荒木由美子、荻野麻衣、小野潤子、藤池かづさ、又江立子、宮野正子

実測・写真整理・図補正・トレース・レイアウト： 高瀬敬子

写真撮影： (株) 地域文化財研究所



第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

福住構遺跡の所在する兵庫県加西市は、兵庫県の南部に位置し、旧播磨国では東部にあたる。北は中国山地、南は法華山などの200m級の山に囲まれ、東の加古川に沿って青野ヶ原の洪積台地が伸びていることから、盆地状の地形をなしている。西侧では姫路市、南側では加古川市と接する。

遺跡は、姫路市の東端部を南流する市川の本流からわずか約6km東に位置するが、水系としては加古川水系の賀茂川の上流部にあたる。加古川からの距離は直線で約11kmである。調査地点の南側を流れる賀茂川は東流して下里川に注ぎ、万願寺川を経て加古川に合流する。

賀茂川や下里川は、北西から南東への谷地形を有するが、比較的広い流域平野をもつ。賀茂川の最上流部では一旦谷が急に狭くなり、低い分水界を超えて市川水系となることから、市川流域と加古川流域をつなぐ交通路として利用される。

福住構遺跡は、加西市の南西部に位置し、加茂川上流の小盆地状を呈した平地の北縁、福住丘陵の南麓に位置し、段丘上から扇状地にかけての立地をもつものと考えられる。今回調査をおこなった地点は、北および西からの谷出口に位置し、扇状地地形末端部にあたるものと考えられる。

第2節 歴史的環境

加西市は、近世の加西郡から現在の西脇市の一部と加美町八千代区の一部を除いた範囲を占めている。近世の加西郡は、古代の賀茂郡の一部で、平安時代後期に東西に分かれて加東郡・加西郡が成立したと考えられている。

遺跡の所在する福住村は、明治10年に片島村と北山村が合併して成立している。播磨国加西郡賀茂村ノ内福住村全図によると、浄土真宗善称寺を中心に「字構」があり、その北側に「字北垣内」、東側に「字南垣内」が記されており、現集落の下には中世後半期の居館が存在したことが想定されている。調査区の北側の現集落内を県道と併行してL字形に曲がる道は旧地形に沿ったものであり、居館址の範囲を示すものと考えられる。本発掘の調査範囲は推定された居館址範囲の南外側に位置し、「字鎌田」「字柳町」にあたる。

善称寺のある片島村は江戸時代には姫路藩領や幕府領などを経ている。それ以前の状況は不詳であるが、南に位置する東側坂村・西側坂村が創坂庄の中核であったことから同庄の一部であった可能性が高い。創坂庄は西下郷庄を改称したものとされている。

西下郷庄はもともと国衙領であったが、播磨国の知行国主であった後白河法皇が梶原景時による横領を停止するように鎌倉幕府に命じている（「吾妻鏡」文治四年（1188）六月四日条）ことから、平家没官領であったと考えられる。のちに庄園化し、「後堀川法華堂領」等を経て、応永一五年（1408）、後小松天皇が樹尾義仁親王に西下郷庄を与えている。後に東大寺東南院領播州西下郷（「経覚私要鈔」康正三年（1357）九月三日条）となったことが見られ、義仁親王の子觀覚親王が落飾して東大寺東南院に入ったためと思われる。

古代においては、下里川上流域には修布里・酒見郷が、中・下流域には三重里・三重郷が比定されており、福住構遺跡はいずれかの里・郷に含まれていたと考えられる。

福住構遺跡周辺の遺跡について概観しよう。

弥生時代の遺跡は近辺ではほとんど知られていないが、万願寺川流域では中期以降に多くの集落がみつかっている。特に長塚遺跡では環濠の機能を有する溝や大規模な方形周溝墓群が検出され、他地域の土器が多く出土している。さらに、後期から古墳時代初頭においては流域の他の集落と比して、集落の規模や他地域との交流関係の多様性において拠点集落の様相を示している。

加西市域では古墳時代前期の古墳や集落はあまり知られていない。加古川流域では、堀山遺跡、西条52号墳、周遍寺山1号墳では古墳に先行する墳墓が見つかっている。加古川の右岸でも八つ塚3号墳、神吉山5号墳もその可能性が指摘されている。前期古墳では日岡山古墳群や愛宕山古墳等の前方後円墳が加古川下流域左岸に存在し、中流域では敷地大塚古墳が存在する。右岸では天坊山古墳や長慶寺山1号墳などが存在するが、規模は小さい。加西市域では集落遺跡は西山谷遺跡が存在する。西の市川を少し下った姫路市域には横山古墳群や黒岩山古墳などが確認されている。

中期に入ても加古川下流域では、西条古墳群で前方後円墳である行者塚古墳を中心とした大型古墳がみられるが、右岸では小型の古墳のみ認められ、いくつかの古墳や集落では渡来系遺物が出土していることが特徴的である。加西市域では前方後円墳である玉丘古墳を中心とした玉丘古墳群が造営される。

後期に入ると古墳の数や分布は大きく広がり、福住構遺跡周辺では、東側で矢口古墳群（43）・寺谷山古墳群（46）・出屋敷古墳群（47）、南側の賀茂川対岸では式式の横穴石室を有する剣坂古墳（7）や石棚をもつ横穴石室墳である剣坂大塚古墳（8）などが存在する。これらの古墳群はいずれも福住構遺跡から500m以上離れており、特に遺跡の西側一帯は古墳の分布密度は低くなる。また、加西市域で特徴的な事象として、竈山石系の石棺材を産出する高室（50）や長（13）の山塊が存在することが挙げられ、後藤山古墳（23）など市域や周辺には石棺材が点在している。

加西市は7世紀後半から平安時代の古代寺院が多く、仏教文化が早くから伝播してきた地域とされる。遺跡周辺では、南側で古法華（14）の石造浮彫三尊仏像や法華山一乗寺（16）が知られている。また北側では吸谷廬寺、東側では野条廬寺（30）が知られているが、これらの仏教関係の遺跡から福住構遺跡までは2km以上離れる。

遺跡南方の加古川市と接する地域には奈良時代から平安時代にかけての窯跡が多数見つかっており、西側の姫路市側でも点在している。白沢1・2号窯などでは7世紀中頃に生産を開始し、白沢窯跡群や札馬古窯跡群（18）や投松古窯跡群（25）・戸井町坪窯跡群（27）などを総称した志方窯跡群として広がりを見せ、須恵器の一大生産として存在する。

福住構遺跡の南側の加茂川を挟んだ右岸では上代遺跡（4）、上代構居跡（5）などの遺跡が知られており、上代遺跡は古墳時代から奈良時代にかけての遺跡で、堅穴住居が検出され、瓦なども出土しており、福住構遺跡と共にした性格をもつ。



第2図 福住構遺跡の位置と周辺の遺跡 1:35000

- | | | | |
|-----|------------|-----|--------|
| 1. | 福住構遺跡 | 30. | 野条廃寺 |
| 2. | 山下城跡 | 31. | 郡長遺跡 |
| 3. | 町田遺跡 | 32. | 王子遺跡 |
| 4. | 上代遺跡 | 33. | 牛居構居跡 |
| 5. | 上代構居跡 | 34. | 垣内遺跡 |
| 6. | 東劍坂中世墓 | 35. | 野上構居跡 |
| 7. | 劍坂古墳（狐塚古墳） | 36. | 大村遺跡 |
| 8. | 劍坂大塚古墳 | 37. | 大村古墳群 |
| 9. | 劍坂東山古墳群 | 38. | 向山古墳群 |
| 10. | 劍坂熊野神社古墳 | 39. | 五反田遺跡 |
| 11. | 長山古墳 | 40. | 二反田遺跡 |
| 12. | 西長新池散布地 | 41. | 堀坪遺跡 |
| 13. | 西長採石場 | 42. | 矢ノ下遺跡 |
| 14. | 古法華遺跡 | 43. | 矢口古墳群 |
| 15. | 善坊山城跡 | 44. | 岸呂古墳群 |
| 16. | 法華山一乗寺 | 45. | 鎮岩田中遺跡 |
| 17. | 中谷古窯跡群 | 46. | 寺谷山古墳群 |
| 18. | 札馬古窯跡群 | 47. | 出屋敷古墳群 |
| 19. | 三口上池窯跡群 | 48. | 池田古墳群 |
| 20. | 成池窯跡群 | 49. | 円山古墳群 |
| 21. | 三口東野窯跡群 | 50. | 高室採石場 |
| 22. | 芋畦池窯跡群 | 51. | 木ノ下遺跡 |
| 23. | 後藤山古墳 | 52. | 横田遺跡 |
| 24. | 中津谷古窯跡群 | 53. | 石櫃戸古墳 |
| 25. | 投松古窯跡群 | 54. | 山下古墳群 |
| 26. | 倉谷大池ノ下窯跡群 | 55. | 小丸山古墳群 |
| 27. | 戸井町坪窯跡群 | 56. | 御車下古墳 |
| 28. | 塙谷窯跡群 | 57. | 御車場古墳 |
| 29. | 中溝遺跡 | | |

【参考文献】

- 甲陽史学会 1958「播磨古法華山石仏と繁昌天神森石仏」甲陽史学会研究報告第二
 平凡社 1999「兵庫県の地名」「日本歴史地名系」第29巻II
 加西市教育委員会 2005「殿垣内遺跡・長塚遺跡」加西市埋蔵文化財発掘調査報告56
 加西市教育委員会 2005「鍬塚古墳群」加西市埋蔵文化財発掘調査報告59
 加西市史編さん委員会 2007「加西市史」第1巻
 兵庫県教育委員会 1998「塙潤3号墳」兵庫縣文化財調査報告第181冊
 兵庫県教育委員会 2006「加西南産業田地内遺跡調査報告書」兵庫県文化財調査報告第302冊

第3章 遺構

第1節 調査の概要

福住丘陵から南に降りた山裾に立地し、北からと西からの谷の出口にあたる。南側を流れる賀茂川の流域に形成された沖積盆地はこれより上流の西側では急激に狭くなる。遺跡からは南東方向に開けた地形が広がる。

確認調査の結果を受けて、175mにわたって本発掘調査が実施された。南西から北東へ順に仮に1～4区と呼称している。調査範囲は道路拡幅部に限られているため、南西から北東に細長いいびつな形となり、北東端の4区はT字路交差点にあたるため、南側へ屈曲している。調査地点は大きく北から南へと低くなる地形にあたり、さらに南側では大きく下って沖積地となるものと考えられる。調査地点内では、北東から南西へと徐々に下がっており、山から広がる微高地の末端部にあたるものと考えられる。

耕土・床土（盛土）を重機によって除去すると、暗オリーブ褐色シルト質極細砂・同シルトの上層包含層となる。さらに調査範囲内の南西半部では多くの遺物を含む黒褐色シルト質極細砂の下層包含層を検出した。この包含層は確認調査の際に検出されたものである。調査区の北東半部では上層包含層下で遺構が検出された。遺構検出面は北東端部では黄褐色中砂混じり極細砂の土層であるが、この土層は南西へ向かうに従い急激に下がっていき、南西半部ではその上部に堆積した黄灰色シルト質粘土の土層上面に遺構が検出される。黄褐色中砂混じり極細砂面での遺構は極めて少ないとから、この面は後世に削平されたものと考えられる。

第2節 包含層

上層包含層は調査範囲全面にわたって最大40cmの厚さで堆積していた。この包含層には弥生時代から奈良・平安時代の遺物も含まれるが、新しいもので14世紀代の東播系須恵器鉢や15世紀後半頃の瀬戸・美濃焼運弁紋碗などが含まれていた。15世紀代に特徴的な備前焼を含まないが、上層包含層は15世紀後半以降に堆積したものと考えられる。

この上層包含層は更にマンガンの沈殿などの状況から2～3枚に分層することが可能であるが、遺物が最も多く出土するのはその下面近くである。このことから上層包含層は、遺物の出土状況を見ながら、一部は重機によって掘削をおこなった。上層包含層に近い下層包含層からは1点のみであるが、石鎚（S2）も出土している。

上層包含層の下面では、一部に幅約30cmの条溝が数条、県道と並行する方向に走っている状況が観察された。畑の畝状の痕跡と考えられる。また、下層で検出された水田址の大畦畔を一部削って小畦畔に作り替えている部分や、更に上面の粘土層でも小畦畔状の高まりが観察されたが、面的な広がりを捉えるまでには至らなかった。後述する下層で検出できた水田址以降、連続と水田、あるいは畑として該当地区が利用されてきたことを示している。

上層包含層の下半及び下層包含層を遺物の出土に注意しながら、人力によって掘削したところ、下層包含層は厚さ最大25cmにわたって黒褐色の土層として南西端部分の1・2区にのみ分布していることが判明した。この下層包含層は弥生時代から奈良時代後半までの遺物が混在しており、土器が一部突き

立った状態で出土していることから、人为的に埋められた可能性が考えられる。中世までの客土であつたとしても、あまり遠方から搬入されたとは考えにくく、やはり供給源としては調査地北側の山裾に広がる段丘面や扇状地上を想定したい。

第3節 遺構

検出できた遺構は、水田址・堅穴住居址・溝・柱穴である。

水田址

調査区の南西半部では、上下層の包含層を除去し、さらに土器を含まない黒褐色の土壤化した可能性の高い層を下げていくと、褐灰色シルト質粘土及び黒褐色極細砂質の土層と黄灰色シルト質粘土が偏在して堆積している面を検出した。これらの土層には遺物は含まれていない。黄灰色シルト質粘土は帯状に広がっており、断ち割りをおこなったところ、他の土層はこの黄灰色シルト質粘土の上に水平に堆積していることが判明した。また、土層断面の観察から、黄灰色シルト質粘土が水田畦畔状に盛り上がりっている部分があり、水田遺構ではないかと判断された。

畦畔状の高まりは少なくとも2面で確認でき、水田址は複数面存在した可能性があるが、平面的には下層面でのみ検出できた。斜面上方の東側では水田面に土壤層が確認できたが、西側の斜面下方では直接下層包含層が覆っている。

検出できた水田址は、畦畔を構成する土壌と水田の土壌層が顕著に辨别できたため検出することが可能であった。但し、検出できたのは明瞭な大畦畔が存在したため、調査区壁面の土層断面においても小畦畔は確認することが困難であった。

大畦畔は、下幅約150cmで、高さは最も高い部分で約20cmを測る。大畦畔は屈曲しながらほぼ調査区に沿って走っており、その屈曲部分に小畦畔が分岐しており、9ヶ所を検出できた。大畦畔の走る方向は地形に則したものと考えられる。大畦畔は堅穴住居址の埋土上面にまで及んでいるが、堅穴住居址以北では平面的には明瞭にし得なかった。

大小の畦畔によって分けられた水田は調査範囲内で7枚以上存在するが、調査範囲の狭小なところから、1枚毎の面積を測るには至らなかった。所謂、不定形小区画タイプの水田と考えられる。近辺では圃場整備以前にも条里地割りタイプの水田は見られなかつたそうである。

水田面は平坦であったが、明瞭な足跡等は認められなかつた。これは洪水砂が覆って検出された水田址ではないことが要因であろう。但し、部分的に非常に識別し難い小半月状の痕跡がみられ、耕具痕跡の可能性があるものと思われる。

水田土壌中にはほとんど土器等は含まれておらず、畦畔上などで少量の弥生時代から奈良時代の土器片が食い込む状態で出土している。これは下層包含層に属するものと考えられ、水田の時期を推定できる資料となり、8世紀中頃以前の時期が推定できる。また、大畦畔の下に延びる溝は、埋土等から堅穴住居跡と同時期のものと思われ、堅穴住居址上面にまで畦畔が延びていたことが推測できることから、水田址は堅穴住居以降のものと推定される。

水田址が検出された調査区の南西端部を更に断ち割ったところ、検出できた水田面より下層に数面の砂層が確認できた。一部の層は土壤化しており、下層にもさらに廻る水田面が存在する可能性を残して

いる。残念ながら湧水が著しく、時間的制約のため、面的調査は実施していない。断ち割りの際に風化の著しい小土器片が出土したが、弥生時代中期以降の可能性を考えている。南西側の確認調査ではこのような水田土壤は認められていない。地元の方の話によると南の住宅地で掘削したところ土器がたくさん出土たとのことで、南の沖積地では下層にも水田址などの遺構や包含層が存在する可能性を指摘しておく。

堅穴住居址

調査区の中央北寄りで、南北4.6m、東西4.4mの平面形が方形を呈する堅穴住居址が検出された。屋内高床部（ベッド状遺構）をもつ。確認調査の際に一部検出された土坑がちょうど北東の隅部に対応する。壁面の方位は東西南北にほぼ一致する。

堅穴住居址には、外壁面に沿った幅約10cm、上面からの深さ約27cmを測る明瞭な周壁溝が巡るが、東壁南半部では検出されなかった。屋内高床部は、南側で幅100cm、高さ4cm、西側では幅75cm、高さ3cm、北側では幅85cm、高さ9cmを測る。

屋内高床部は貼り土によって構築されており、周壁溝はその上面から切り込んでいる。屋内高床部上面の一部には炭化材が残存していたことから、焼失住居である可能性が高い。

中央やや北寄りには直径50cm、深さ8cmほどの小規模の中央土坑があり、炭化材及び土器が埋積していた。土坑から南へ伸びる小溝が取り付く。また、南東壁側には屋内高床部は見られず、壁溝に続く深さ10cmほどの土坑が検出できた。

黒褐色極細砂の住居址埋土は、一部上層包含層や水田土壤によって削平されていた。この部分の上層包含層からは、65の須恵器杯等が出土している。堅穴住居跡の埋土中や床面からは大量の土器が出土しているが、土器の残存状況は著しく悪い。中央土坑北側の屋内高床部壇には甕など数個体が出土しており、床面に置かれていた可能性が高い。また、台石（S3）が南西隅の屋内高床部上面に据えられている。台石の横からはサヌカイト製の石器（S1）が1点出土している。

屋内高床部の貼り土を断ち割ったところ、南西の床面を埋めている状況が観察できた。床面では不整形の落ち込みが数ヶ所見られたが、その埋土も貼り土に類似しており、床面は全体に土を貼って成形していたものであろう。貼り土等からは遺物は出土していない。

堅穴住居址床面には明確な主柱穴は認められなかった。南西隅部では唯一床面が残存していたが、直径55cm、深さ10cmほどの不整形な窪みがみられるだけで、さらに先述の台石が上面に置かれており、主柱穴としがたい。

堅穴住居址の外側ではいくつかの小柱穴が検出されたが、上屋構造に伴うものかは不明である。また、調査区壁面の土層観察では、堅穴状に掘られた外側に2.5~3mの幅で約10cmの高さの盛り上がりが存在することがわかった。周堤帯の可能性が考えられるが、平面的には検出することができなかつた。水田に伴う畦畔の可能性もある。

溝

堅穴住居址の約3m南西で検出された。幅約30cm、深さは、最も深い位置で約20cmを測る直線的な小溝である。ほぼ南北方向に走り、堅穴住居址の壁の方向とほぼ一致する。約3.7m延びて南側で途切れる。

大畦畔上面及び、土壤層を除去した水田面で検出され、水田面では上面が削られていることから、水

田址以前のものである。埋土は黒褐色極細砂で、堅穴住居址の埋土と同じである。遺物は出土していないが、堅穴住居址と同時期のもの可能性が高い。

柱穴

調査区の北東端では東へ落ち込む傾斜地形が検出され、その傾斜部にかかるようにほぼ東西に並ぶ3基の柱穴状の遺構を検出した。それぞれ直径が20cm程度、深さも10cm程度のものである。柱穴間の距離も0.7mと短いことから、同じ建物を構成するとは考え難い。遺物は出土しなかったが、埋土は堅穴住居址などとは異なっている。

堅穴住居址とこれらの柱穴が検出された地点との間には、遺構が検出されなかった空間が存在するが、この部分が調査範囲内で最も北高の高い位置であることから、後世に削平された可能性が高い。

第4章 遺物

福住構造跡からは、その調査範囲に比して多くの遺物が出土している。土器類と石器類があるが、そのほとんどが土器であり、調査区の西半分を中心とした1～3区で検出された水田址を覆う包含層からのものと、3区で検出された住居址内から出土した土器が大半を占める。包含層出土の土器は破片の状態で出土し、接合はほとんどできなかった。また、住居址出土の土師器も残存状況は悪い。

第1節 住居址SH 1 出土の土器 (図版4・5、写真図版8～11)

1～41の土器は、SH 1 から出土した。唯一検出された堅穴住居址であるSH 1 は、焼失住居であったことに起因したためか、多くの土器が出土した。遺物取り上げカードの録締のため、各々の遺物についての出土位置や層位が不明確となったが、3・7・11・17～19・24・27は埋土からの出土であり、5・6・9・23・29・34は床面近くからの出土である。但し、土器の保存状態は非常に悪く、土ごと取り上げたものもある。また図化できた土器の多くは小片である。

壺形土器 (1～22)

壺形土器（以下、壺）は、他の器種に比べて出土点数が多い。「く」字形の口縁部を有し、胴部最大径が中央付近にくる球形のものが多い。底部まで残存するものはないが、丸底あるいはわずかに尖った底をもつものであろう。

口縁部は緩やかに外反するものが多いが、15～18のように内湾気味に広がるものが認められる。口縁端部は丸く納めたもの（1～10）、尖り気味に納めたもの（11～15）、外方につまんで上方に面を作るもの（16～18）、上方につまんで外方に面をもつもの（19～22）がある。

上半部の成形は、粘土紐を積み上げた痕跡を内面に残すものが見られ、外面には平行タタキを施した痕跡が多く認められる。タタキ目が頭部にまで及ぶもの（2・3・5・14）もある。タタキのほとんどが斜め右上がりの平行タタキである。

外面の調整には、ハケを用いずにナデによって口縁部や一部胴部を仕上げ、タタキをよく残すもの（1～6）も一定量見られるが、外面に丁寧にハケを施してタタキをほとんど消した後、口縁部や部分的に胴部をナデによって仕上げるものが多い。

内面の成形・調整は下半部が残るものはヘラケズリが見られ、上半部も頭部の屈曲までヘラケズリを施すもの（1・3・10・12・16～19）が見られる。その他のものでは、粘土紐の痕跡を残すものも含めて、イタナデや強いナデによって仕上げるものが多い。

4・5の外面には黒斑が認められる。5は壺形土器の可能性もあるがここに含めている。

壺形土器 (23～27)

壺形土器（以下、壺）は、5点図化できた。

23は広口壺口縁部である。球形の胴部から短く外反する口縁部へと続く。口縁端部は丸く納める。外面はナデによって仕上げ、一部に黒斑が認められる。胴部内面は斜め上方方向のヘラケズリ後、ナデによって仕上げる。壺に分類した5も類似したプロポーションであるが、外面の調整が異なる。

24は二重口縁壺の口縁部である。大きく外反する頭部から、一旦屈曲して外反気味の口縁部へと続く。口縁端部は丸く納める。器表面の調整は、頭部外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を施した後、ナデによって仕上げる。頭部上半外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキを施し、一部ナデによって仕上げる。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げるが、内面の屈曲部には細かいヘラミガキが残る。

25~27は直口壺である。肩部から屈曲して直線的に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸く納める。口縁部外面には縦方向のハケが残る。口縁部外面はナデによって仕上げている。屈曲部から肩部内面はヘラケズリあるいは強いナデで調整している。

鉢形土器（28~33）

鉢形土器（以下、鉢）は6点図化できた。28~30は甕に近い器形だが、口縁部が短く、屈曲が緩やかなことから鉢とした。

28は小型のもので、内面をナデによって仕上げている。外面の調整は不明である。

29は屈曲せずに直立する口縁部をもつ。口縁部はユビオサエの後、ナデで仕上げる。球形の体部外面にはハケ調整が残り、一部に黒斑がある。内面はナデによって仕上げる。

30は球形の体部から緩やかに聞く短い口縁部をもつもので、体部外面は細かいハケで、口縁部内外面は粗いハケで調整している。口縁端部は横方向のナデで仕上げる。体部内面はナデ調整がみられる。

31・32は半球状の体部から屈曲して大きく聞く口縁部をもつものである。32では口縁部はユビオサエを残してナデによって仕上げている。体部外面はハケ調整後、ナデによって仕上げている。内面には板ナデ状の強いナデが施されている。

33は平底をもつ椀状の鉢で、ユビオサエを残しながらナデによって仕上げている。外面にはハケ調整が一部残る。

底部（34・35・36）

34は小さい脚部をもつ底部で、製塙土器の可能性がある。短く聞く脚部から大きく湾曲して体部へと至る。脚内面は窪ませた程度である。ナデによって仕上げている。

35は平底の底部で、大きく聞き体部へと続く。外面にはユビオサエや平行タタキを残すが、ハケ及びナデによって調整している。内面にはユビオサエを残して板ナデ状のハケで調整している。大型の壺か鉢であろう。

36は丸底の底部である。内面にはユビオサエを残し、ナデで仕上げる。外面には板ナデ状の痕跡がみられる。外面には黒斑がある。破片上部が薄いことから大型のものではなく、手づくね土器かもしれない。

高杯（37~40）

37は高杯杯部である。屈曲して大きく聞き、口縁部へ至る。内外面にヘラミガキの痕跡が残るが、磨滅のため、方向や単位は不明である。

38は高杯脚部である。直立気味に聞き、短く緩やかに屈曲させて脚端部へと至る。端部はヨコナデで仕上げるが、筒部は縦方向のヘラミガキを施す。内面は横方向のヘラケズリにより成形する。

39は小さな杯部と直線的に聞く脚部をもつ高杯である。内湾気味に大きく聞く杯部は外面に縦方向の

ヘラミガキを施し、内面や端部をナデにより仕上げる。大きく開く脚部にはおそらく4方向の円孔を焼成前に穿孔する。外面は縦方向のヘラミガキ後、一部にハケを施し、脚端部や上端の接合部には横方向のナデを施す。内面は上方は縦方向にナデを施し、脚端部近くは横方向のハケを施した後、ナデによって仕上げる。

40は直線的に開く高杯脚部である。中実の筒部から大きく開き、焼成前の円形の穿孔が2ヶ所残存する。内面の調整はナデによるものと思われるが、外面は縦方向のハケの後、ヘラミガキを施し、脚端部などの一部はナデによって仕上げる。

器台（41）

41は39・40の高杯と同様の直線的な脚部であるが、筒部やわずかに残る上半部内面がナデによって仕上げられるため器台とした。4方向の穿孔をもつ。外面は縦方向のハケ調整の後、ナデによって仕上げ、脚端部や穿孔近くまでは横方向のナデで仕上げる。内面は横方向のイタナデ状の痕跡が残る。

第2節 包含層出土の土器（図版6・7、写真図版12~15）

遺物包含層は調査区の南西側で厚くなり、上下2層に分層できる。上層包含層は調査区の全域に及ぶが、含まれる遺物の量は南西側の1・2区が多く、44・46・52・55・56・60・70・78・81・82・83・84・86・87・93・94・95・97・99・100・101の21点が図化できた。また、南東側の3・4区では、53・65・68・72・77・79・88・96・102の9点が図化できた。その他の31点は下層包含層から出土している。

弥生土器・土師器（42~52）

42~45は弥生土器或いは古式土師器の底部と思われる。平底或いは上げ底で、底部外面にはユビオサエを残しており、43には右上がり斜め方向の平行タタキが見られる。

46は土師器壺の口縁部である。屈曲して直線的に開く口縁部へと続く。屈曲部内面にはユビオサエが残り、外面には縦方向のハケの痕跡がみられる。

47は鉢で、短く屈曲して口縁部へ至る。粘土紐の痕跡を残し、ナデによって仕上げる。

48は輪高台をもつ盤底部であろう。開き気味の高台を貼り付けた後、ナデによって仕上げる。一部に黒斑がみられる。

49は甕口縁部で、屈曲した短い口縁部をもつ。体部内面には板ナデ状の痕跡を残す。

50は大型の甕口縁部である。大きく屈曲し広がる口縁の端部は四角く納め、ナデによって仕上げる。口縁部内面は横方向のハケ、体部内面はナデ、外面はユビオサエを残して縦方向にハケを施す。

51は壺口縁部と思われる。短く開く口縁の端部は四角く、わずかに外方へつまみ出す。

52は硬質に焼成された播丹型の土師器鍋の口縁部である。端部は四角く納めている。

須恵器（53~99）

53は返りをもつ蓋である。口径9.95cmの小型のもので、天井部にはヘラ削りを施す。杯Gの蓋としているが、壺の蓋の可能性がある。

54~63は杯Bの蓋である。宝珠形のつまみをもつもの（55）と、扁平なボタン形のつまみをもつものがあり、宝珠形のものも高さをもたず扁平である。天井部にはヘラ削りを施しており、平坦なものと丸みをもつものがある。前者の口径は15.2~16.5cmと大きく、後者は12.9~13.3cmと小さい。口縁部は端部を鋸く屈曲させているものと、緩やかに屈曲させるものがあり、後者の天井部は丸みをもつものが多い。前者のものには周縁部を外から窪ませるもの（61・63）がある。54は周縁部を意識的に打ち欠いた可能性がある。

64は稜桙の蓋である。輪状のつまみがつく。

65は杯Hである。堅穴住居（SH1）埋土上層から出土しているが、下層包含層のものと判断した。口縁部の立ち上がりは1.3cmでやや内傾し、端部は丸く納めている。底部外面にはヘラケズリが施される。

66・67は杯底部である。回転ヘラ切り底部から稜線をもたずに立ち上がる。底面にはヘラ切り後の平行タタキがみられる。

68~74は杯Aである。底部は回転ヘラ切り後、ナデによって調整する。口径は11.8cm（70）~15.9cm（74）、高さは2.45cm（70）~3.45cm（68）と幅がある。器壁の極端に厚いものと、薄いもののが存在する。

75~82は杯Bである。高台は断面が方形のものがほとんどであるが、三角形状のもの（79）もある。底部内面には一方向あるいは多方向の仕上げのナデを施すものがほとんどである。78は内面に自然釉が付着する。器高の著しく高いもの（81）や高台内面に爪状の痕跡を残すもの（82）がある。

83~85も輪高台を有する底部であるが、杯Bよりは高台が大きく、立ち上がりの屈曲が緩やかなものがある。椀などの底部であろう。

86~88は椀である。86は内湾して立ち上がり、端部でわずかに外反する。87は回転糸切の底部から低い平高台を作った後、外方に立ち上がる。底部内面はわずかに低く作る。88は回転ヘラ切底部から低い平高台の後、外方へ立ち上がる。

89・90は皿である。高台をもたないもの（89）と、もつもの（90）がある。89の底部はヘラ切り後、ヘラ削りを施す。90の外面には自然釉が付着する。

91は壺の蓋と考えるが、金属器写しの模の可能性もある。天井部にはヘラケズリを施し、内外面には自然釉が付着する。

92は直線的に開く壺の口縁部である。端部上部に面をもつ。加飾をもたない。

93~96は壺の口縁部である。小型のものと大型のものがあり、93を除くと端部は四角く作り、上端をつまみ上げる。

97・98は壺底部である。平底のものと高台を貼り付けたものがある。立ち上がりにはヘラケズリを施す。97では底面をナデによって仕上げ、98の高台内部はヘラ切り未調整である。

99は束挿系こね鉢の口縁部である。端部を肥厚させ、上方につまみ上げる。

陶磁器（100・101）

100は瀬戸・美濃焼椀の龍泉窯系青磁写しの細蓮弁紋碗である。緩やかに内湾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸く納める。器表面には浅黄色からオリーブ黄色の灰釉が施され、外面には先端が三角形に尖った蓮弁紋が縦線を共有して描かれる。縦線は中途で途絶える。

101は白磁皿である。体部は緩やかに外反し、水平に開いた後、端部は上方にわずかに肥厚させて丸

く納める。

瓦 (102)

平瓦片である。3区の地山面までの掘削の際に出土した。瓦としては唯一の出土であるが、近辺に瓦葺きの建物があった可能性は低い。近隣の上代遺跡からも古代に属する瓦が出土している。瓦の凹面には1cmあたり6本の繊維で織られた布目が見られる。凸面には縄目タキが残されているが、残存状況は悪い。

第3節 石製品 (図版8、写真図版16)

S 1は、堅穴住居址SH1の屋内高床部床面近くの台石(S 3)の横から出土した。サスカイト製のスクレイバーで、長さ3.6cm、幅2.8cm、厚さ1.1cmを測る。剥片の一長辺を片側から調整して刃を作る。重さ94gを測る。

S 2は、1区の下層包含層から出土した。サスカイト製の凹基無茎石錐である。基部の抉りはやや深い。長さ2.3cm、幅2.2cm、厚さ0.45cmを測り、正三角形に近い形状をもつ。重さは14gを測る。

S 3は、堅穴住居址SH1から出土した台石である。長さ34.4cm、幅20.0cm、厚さ11.05cmの平面形が三角形を呈した硬質の川原石を使用しており、一辺が打ち削られている。表裏面の中央部はよく磨滅しており、表裏面の周辺部や二方の側面もやや粗いが磨滅がみられる。擦痕や部分的に窪んだ箇所は認められない。

兵庫県教育委員会 1998「白沢3・5号窯」兵庫県文化財調査報告第184号

兵庫県教育委員会 2000「志方窯跡群II-投松支群」兵庫県文化財調査報告第217号

表1 福住構造跡出土遺物一覧表

報告番号	写真回数 番号	種別	縦幅	法面積(cm ²)				残存 状態	出土地区	出土遺物	層位
				口径	幅面	底径	その他				
001	8	土断面	塊	114.25	133.15	—	—	円形	堅穴	堅穴	地盤
002	8	土断面	塊	114.30	144.0	—	—	—	堅穴	堅穴	地盤
003	8	土断面	塊	112.05	161.87	—	—	3枚	堅穴	堅穴	堅穴(堅土・黒土上部)
004	8	土断面	塊	111.80	163.0	—	—	1.5枚	堅穴	堅穴	地盤
005	8	土断面	塊	113.75	140.30	—	—	1枚	堅穴	堅穴	地盤
006	8	土断面	塊	113.80	113.40	—	—	1枚	堅穴	堅穴	地盤
007	8	土断面	塊	113.2	137.70	—	—	1/10	堅穴	堅穴	地盤
008	8	土断面	塊	113.7	161.0	—	—	1/8	堅穴	堅穴	地盤
009	8	土断面	塊	113.55	112.40	—	—	1/12	堅穴	堅穴	地盤
010	8	土断面	塊	111.2	128.0	—	—	小円	堅穴	堅穴	地盤(堅土)
011	9	土断面	塊	112.0	136.00	—	—	円形	堅穴	堅穴	地盤(堅土)
012	9	土断面	塊	112.45	125.0	—	—	1.5枚	堅穴	堅穴	地盤(堅土)
013	9	土断面	塊	110.85	174.0	—	—	円形	堅穴	堅穴	地盤
014	9	土断面	塊	112.7	132.55	—	—	1枚	堅穴	堅穴	地盤
015	9	土断面	塊	112.95	164.0	—	—	—	堅穴	堅穴	地盤
016	8	土断面	塊	114.60	143.0	—	—	1.5枚	堅穴	堅穴	地盤
017	8	土断面	塊	115.0	138.65	—	—	円形	堅穴	堅穴	地盤(堅土)
018	8	土断面	塊	115.85	167.70	—	—	1.5枚	堅穴	堅穴	地盤(堅土上層)
019	9	土断面	塊	116.7	153.50	—	—	円形	堅穴	堅穴	地盤(堅土・黒土上部)
020	9	土断面	塊	111.95	142.0	—	—	円形	堅穴	堅穴	地盤
021	9	土断面	塊	15.9	121.25	—	—	1枚	堅穴	堅穴	地盤
022	9	土断面	塊	17.5	121.40	—	—	2枚	堅穴	堅穴	地盤
023	9	土断面	塊	12.65	116.1	—	—	3/4	堅穴(堅土)	堅穴	地盤
024	9	土	塊	18.5	160.02	—	—	2枚	堅穴	堅穴	地盤(堅土)
025	10	土	塊	11.60	16.0	—	—	1枚	堅穴	堅穴	地盤(堅土)
026	10	土	塊	10.80	15.60	—	—	円形	堅穴	堅穴	地盤(堅土)
027	10	土断面	塊	112.60	121.00	—	—	円形	堅穴	堅穴	地盤
028	10	土断面	塊	117.45	138.85	—	—	1枚	堅穴	堅穴	地盤(堅土)
029	10	土断面	塊	108.85	162.15	—	—	1枚	堅穴	堅穴	地盤
030	10	土断面	塊	112.80	176.0	—	—	1枚	堅穴	堅穴	地盤
031	10	土	塊	111.0	142.25	—	—	1/2枚	堅穴	堅穴	地盤
032	10	土断面	塊	112.0	163.5	—	—	1/4枚	堅穴	堅穴	地盤
033	10	土断面	塊	9.55	8.0	41.0	—	1/2枚	完存	堅穴	地盤
034	10	土断面	解剖	—	—	3.82	—	堅穴(4.0)	堅穴	堅穴	地盤
035	11	土断面	底盤	—	—	3.00	4.8	—	(浅)完存	堅穴	地盤
036	11	土断面	底盤	—	—	—	—	—	完存	堅穴	地盤
037	11	土断面	高科	317.25	35.31	—	—	1/4枚	—	堅穴	地盤
038	11	土断面	高科(難)	—	—	42.77	—	堅穴(11.0)	堅穴	堅穴	地盤

報告番号	写真回数	種別	記録	計量 (cm)			現存 状態	出土地区	出土遺物	場所
				口径	筒高	底径				
039	11	土断面	高杯	(10.80)	(8.30)		輪底部(1.65)	手形2/3 輪底1/2	往期	
040	11	土断面	高杯(縦)	-	(2.72)		輪底部(1.12)	輪底部1/4	3区	往期 墓土(黒色土底混り)
041	11	土断面	台形	-	(2.80)		輪底部(1.085)	輪底部1/2	往期	
042	12	胎生	底部(直)	-	(2.2)	2.9	-	完存	1区 東半	下部 包含層
043	12	胎生	底部(曲)	-	(2.72)	(3.6)	-	1/3	1区 東半	下部 包含層
044	12	土断面	直底	-	(2.80)	(4.1)	-	1/2	西1区	
045	12	土断面	底部	-	(1.9)	(5.6)	-	1/4	2区	
046	12	土断面	直	(17.7)	(6.15)	-	1/10	-	2区	上部包含層含む
047	12	土断面	鉢	(13.8)	(3.80)	-	小形	-	2区	
048	12	土断面	直	(2.25)	(1.18)	-	-	1/4弱	西1区	下部 包含層
049	12	土断面	直	(16.0)	(6.6)	-	1/12弱	-	西端1区	下部 包含層
050	12	土断面	直	(22.15)	(6.67)	-	1/12	-	西端1区	下部 包含層
051	12	土断面	直	(13.1)	(2.15)	-	1/9	-	2区	
052	12	土断面	鉢	(22.2)	(6.6)	-	1/12	-	2区	
053	12	胎表面	直	(9.95)	(1.25)	-	小形	-	3区	地山まで
054	13	胎表面	直	(2.8)	-	-	つまみ付2.5	-	手形2/3 輪底1/2	西端1区
055	12	胎表面	直	(2.25)	-	-	つまみ付2.75	-	つまみ付完存	2区
056	13	胎表面	直	(1.55)	-	-	つまみ付2.0	-	つまみ付完存	西1区 東半
057	13	胎表面	直	(13.3)	(2.2)	-	若干	-	西1区	下部 包含層
058	12	胎表面	直	(1.20)	(2.25)	-	-	1/9	-	2区
059	12	胎表面	直	(15.20)	(1.7)	-	若干	-	2区 西半	
060	13	胎表面	直	(16.55)	(2.25)	-	-	1/9	-	西1区 東半
061	12	胎表面	直	(16.17)	(2.4)	-	-	1/8	-	2区 西半
062	13	胎表面	直	(15.6)	(1.25)	-	-	1/6	-	西1区
063	13	胎表面	直	(15.8)	(1.25)	-	-	1/9	-	1区 東半
064	12	胎表面	直	-	(1.2)	-	つまみ付(4.6)	-	1/3	2区 西半
065	13	胎表面	鉢身	(1.11)	(2.8)	-	-	-	3区	往期 墓土上層
066	13	胎表面	鉢	-	(2.05)	(9.1)	-	1/2弱	西端1区	下部 包含層
067	13	胎表面	鉢	-	(2.45)	(9.0)	-	1/4弱	西端1区	下部 包含層
068	13	胎表面	鉢A	(12.4)	3.45	(8.7)	若干	1/7	3区	直込み上面
069	13	胎表面	鉢A	(12.9)	2.65	(9.2)	-	1/6	1/6	2区
070	13	胎表面	鉢A	(11.8)	2.45	(7.75)	-	1/10	1/4	西1区 東半
071	14	胎表面	鉢A	(13.7)	3.0	(11.0)	1/4弱	1/3	西端1区	下部 包含層
072	13	胎表面	鉢A	(14.70)	3.0	(10.85)	1/6弱	1/3弱	東半1区	地山まで
073	13	胎表面	鉢A	(14.65)	3.4	(11.25)	1/4弱	1/4弱	1区 東半	下部 包含層
074	13	胎表面	鉢A	(15.50)	2.6	(10.89)	1/7	1/3	2区 西半	
075	14	胎表面	鉢B	(13.0)	3.7	(11.6)	1/12	1/7	1区 東半	下部 包含層
076	14	胎表面	鉢B	(14.7)	4.2	(11.1)	若干	1/5	西1区	
077	14	胎表面	直	-	(2.25)	(11.2)	-	1/4	-	3区
078	14	胎表面	直	-	(2.2)	(10.8)	-	1/4	-	2区
079	14	胎表面	直	-	(1.30)	(10.55)	-	1/7	-	東半4区
080	14	胎表面	直	-	(1.7)	(9.0)	-	1/3	-	1区 東半
081	14	胎表面	直	(14.75)	(6.2)	-	1/7	-	2区	上部包含層含む
082	14	胎表面	直	-	(4.1)	(11.9)	-	1/3	西1区 東半	
083	14	胎表面	直	-	(2.1)	(9.25)	-	1/5	西1区 東半	
084	14	胎表面	直	-	(2.1)	(11.6)	-	1/7	2区	上部包含層含む
085	14	胎表面	直	-	(2.05)	(10.2)	-	1/4	2~3区	
086	15	胎表面	直	(10.7)	(2.05)	-	1/10	-	2区	上部包含層含む
087	15	胎表面	底部	(1.75)	17.20	-	1/3弱	-	2区	
088	15	胎表面	鉢	(1.75)	(7.7)	-	1/3弱	-	3区	地山まで
089	14	胎表面	直	(21.40)	2.3	(19.93)	1/6	1/6	2~3区	
090	14	胎表面	直	-	(2.15)	(11.60)	-	1/5	西端1区	下部 包含層
091	15	胎表面	直	(8.6)	(3.35)	-	1/3弱	-	2区	
092	15	胎表面	直	(8.7)	(4.05)	-	小形	-	西1区	下部 包含層
093	15	胎表面	口縁(小切)	(2.7)	(1.15)	-	小形	-	2区	
094	15	胎表面	直	(6.6)	(1.10)	-	1/9	-	西1区 東半	
095	15	胎表面	直	(19.65)	(2.25)	-	小形	-	西1区	
096	15	胎表面	直	(21.7)	(19.45)	-	小形	-	東半4区	縫合口
097	15	胎表面	直	(4.65)	(11.0)	-	1/4	-	西1区	
098	15	胎表面	直?	(6.6)	(11.20)	-	若干	-	1区 東半	
099	15	胎表面	鉢	-	(4.3)	-	小形	-	西1区	
100	15	胎表面	直	(10.85)	(2.7)	-	小形	-	2区	
101	15	胎表面	直	(11.75)	(1.5)	-	若干	-	西1区 東半	
102	15	瓦	平瓦	(2.025)	1.75	厚み(7.5)	-	端面若干	3区	地山まで
103	8	土断面	直	3.6	2.8	1.1	9.5	-	3区	往期 墓土(黒色土底混り)
104	9	土断面	直	2.9	2.2	0.45	1.4	-	3区	往期 墓土
105	11	土断面	直	-	-	-	-	-	3区	往期 墓土
106	11	土断面	底部	-	-	-	-	-	3区	往期 墓土
107	11	土断面	底部	-	-	-	-	-	3区	往期 墓土上層
108	12	財産土器	-	-	-	-	-	-	2区 西半	
109	13	胎表面	輪柱	-	-	-	-	-	3区	地山まで
110	13	胎表面	鉢	-	-	-	-	-	西1区	下部 包含層
111	15	瓦質土器	鉢?	-	-	-	-	-	2区	上部包含層含む
112	15	瓦質土器	把手	-	-	-	-	-	2区	

第5章　まとめ

1.　包含層出土土器について

福住構遺跡では、確認調査時からすでに遺物が多く含まれる包含層の存在が指摘されていた。包含層は主として調査区の西半部に広がっており、一部は上層包含層と下層包含層に分層できる。

上層包含層では土師器鍋、東播系須恵器鉢、瀬戸・美濃椀、白磁皿など15世紀後半頃までの遺物が含まれており、中世後半の時期に各地で作られた土器がもたらされていたことがわかる。確認調査時に小字名及び地形から推定されていた中世の居館址の存在を示すものは、この数点の土器片のみであったが、その存在を完全に否定するものではない。かえって一段高い位置に立地する居館の周辺には水田や畑が広がっていた状況が窺われる。

下層包含層では、弥生時代後期の土器など古い時期の遺物が含まれるが、近隣の白沢窯跡群や志方窯跡群の須恵器と比較すると、8世紀前葉から中葉を中心とした時期の土器が主体をなすことがわかる。

国化できなかった土器も含めて下層包含層出土の土器破片の比率を調べると、総点数が1171点、うち土師器432点（36.9%）、須恵器739点（63.1%）となる。但し、この中には弥生時代から古墳時代の土器も含まれている。また、須恵器のうち杯や椀などの供膳具類は54.9%、壺や甕などの貯蔵具は18.8%（不明26.3%）の比率を示しており、須恵器供膳具が多い傾向が見られる。

ちなみに、上層包含層出土分を含めた総点数1570点では、うち土師器540点（34.4%）、須恵器1030点（65.6%）となる。須恵器のうち供膳具類は53.9%、貯蔵具は11.8%の比率を示している。

出土した須恵器には窯内で変形したものや釉着したものをほとんど含まないことや、同時期の土師器等も出土していることから、この包含層を形成する堆積物は窯跡ではなく集落址からもたらされたものと考えることができる。供膳具が貯蔵具の3倍の点数であることから官衙関連遺跡の存在も想定できるが、墨書き器や鏡など官衙に伴う特殊な遺物が全く見当たらないことも指摘できる。

2.　堅穴住居址について

検出された堅穴住居址は平面形が方形で、屋内高床部をもつ。屋内高床部は一辺の中央部が途切れており、その部分に屋内土坑が存在する。燃焼施設（中央土坑）は中央からやや偏った位置にあり、浅い。これは地床炉型に分類される。主柱穴は明確ではない。

多賀（2009）によると、堅穴住居は弥生時代終末期から古墳時代にかけてほぼ方形化が達成され、屋内高床部（ベッド状遺構）は東播磨地域に顕著に見られる施設で、後期後半には60%の建物に設置されている。燃焼施設では、終末期には地床炉型が圧倒的な割合を占めるようになる。

また、弥生時代終末期から古墳時代前期に存続する方形II C型の堅穴住居では、後期後半～終末期にかけては屋内土坑の位置が次第に外へと移動していく。古墳時代前期になると屋内土坑は壁際中央部からさらに隅へと移動してゆく。福住構遺跡の堅穴住居址の特徴は終末期の様相に当てはまる。

堅穴住居址から出土した土器の内、甕では弥生土器第V様式期からの伝統的な技法を残すものもあり、口縁部の形状では続く布留式土器へ続く様相も認めることができるるものも存在する。しかしながら

そのほとんどは土器の胴部や口縁部のプロポーションは庄内式土器の系統に属しており、庄内式土器併行期とすることが妥当であり、住居址の形態と一致する。

近隣では、長塚遺跡第10次調査4地区SH03が、弥生時代後期以降のものである。周壁溝全周し、主柱穴は屋内高床部の各コーナーに配される。屋内土坑は屋内高床部の途切れた部分に位置する。中央土坑は浅い。また、同第11次調査7地区SH14も弥生時代後期後葉頃のもので、中央土坑は大きく炭化物や焼土がない。主柱穴は床面内部に配されている。

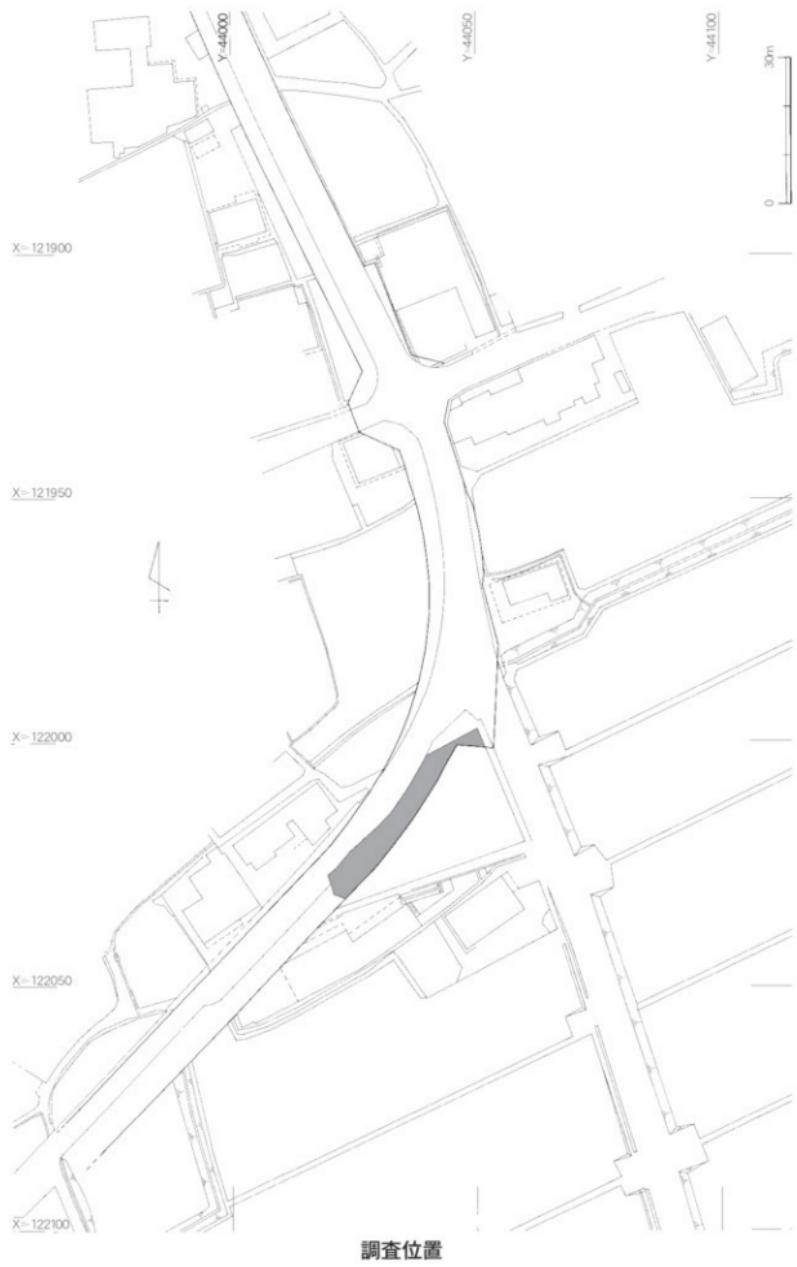
3. 水田址について

検出された水田址は、大きく湾曲し、部分的に屈曲する大畦畔とそこから細かく分岐する小畦畔の状況から、不定形小区画水田の範疇で捉えることができる。不定形小区画水田は、弥生時代の初期からみられるもので、傾斜が大きい地形上に作られるタイプのものである。検出された地点が山裾から広がる段丘上あるいは扇状地上の微高地の末端部を占めていることからこのようなタイプの水田が営まれることは肯綮できよう。また、近辺には条里型地割が残存していないことからも、同様のタイプの水田が連続と営まれていた可能性が高く、水田の形態から時期を特定することはできない。今回検出できた水田は、その層序と出土遺物から古墳時代前期から奈良時代中頃にかけての時期を与えることが可能である。

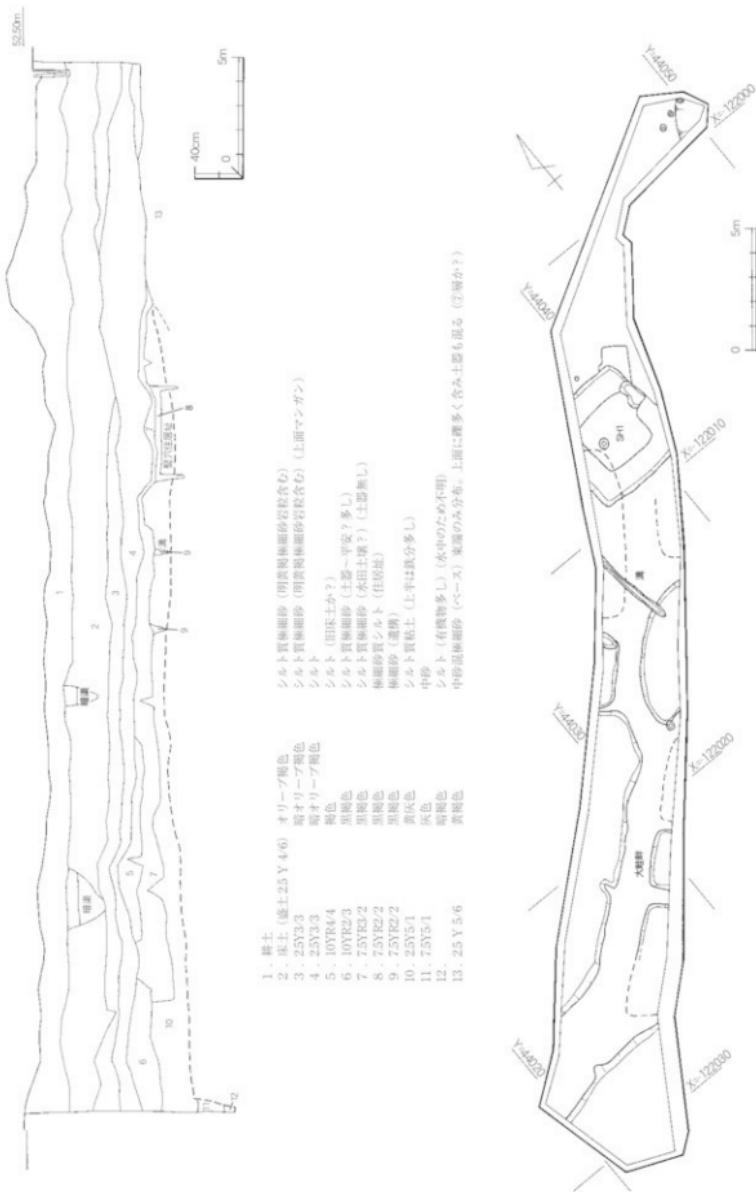
[参考文献]

- 多賀茂治 2009「弥生時代後期の住居構造一家から社会の変化を考える—」『弥生時代後期の社会変化』埋蔵文化財研究会
兵庫県教育委員会 1998「白沢3・5号窯」兵庫県文化財調査報告第184号
兵庫県教育委員会 2000「志方窯跡群Ⅱ-投松支群-」兵庫県文化財調査報告第217号

図 版



図版2



遺構配置及び西壁土層断面

a———

52.00m a'

1 水田土壤

2 7.5YR2/2

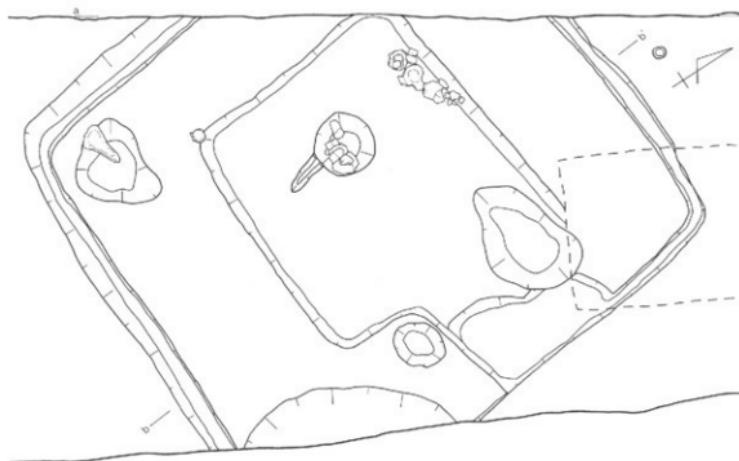
3 5YR3/1

黒褐色

黒褐色

極細砂質シルト

(地山白褐色粘土混り) 屋内高床部 貼床



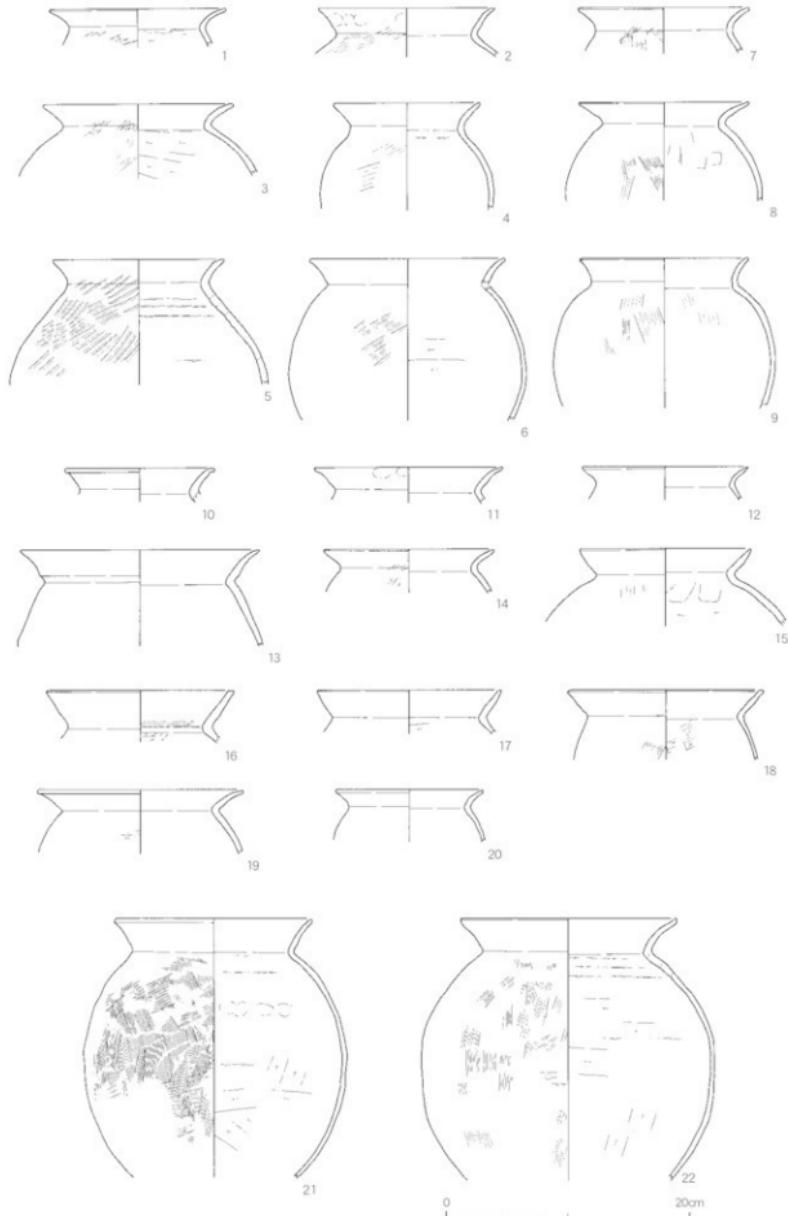
b———

52.00m b'

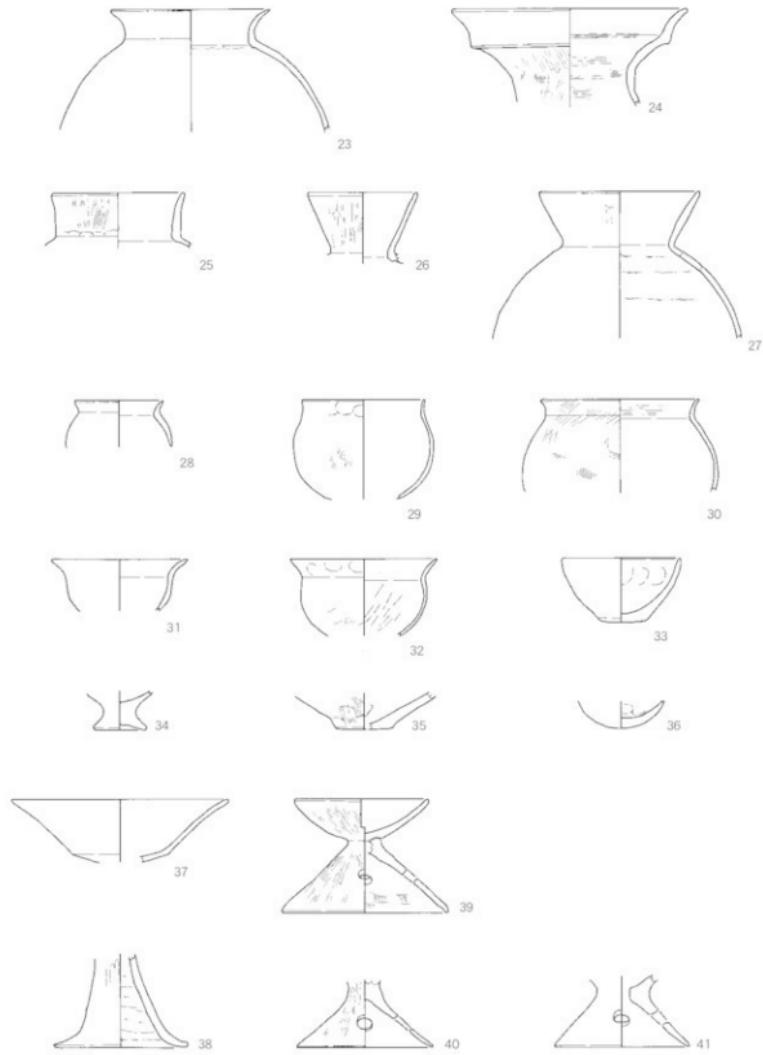
0

2m

竪穴住居址 SHI

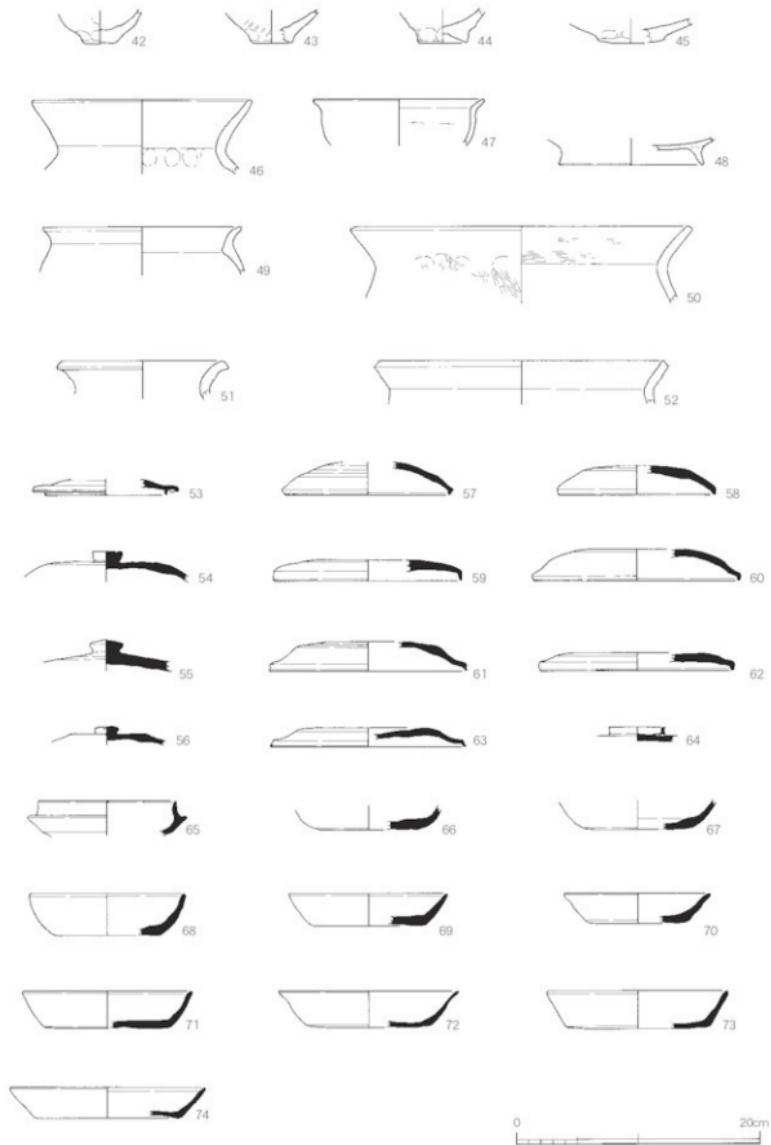


竪穴住居址出土土器 1

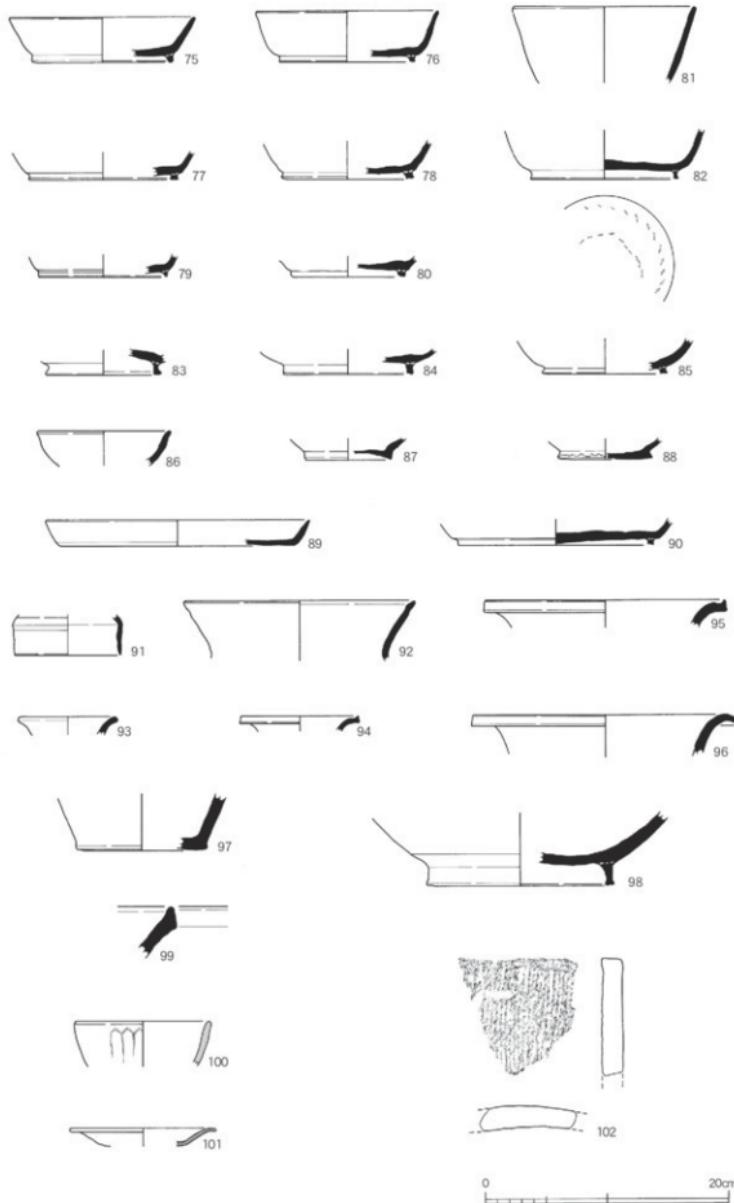


0 20cm

竪穴住居址出土土器 2

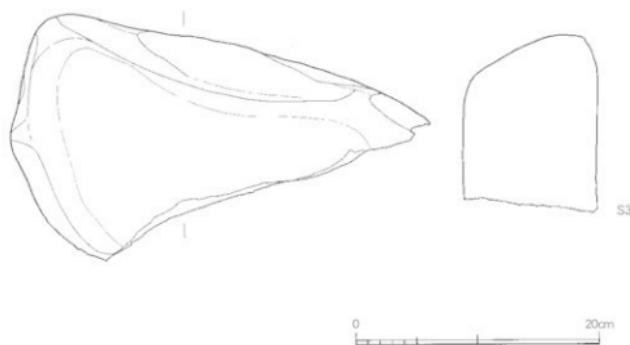
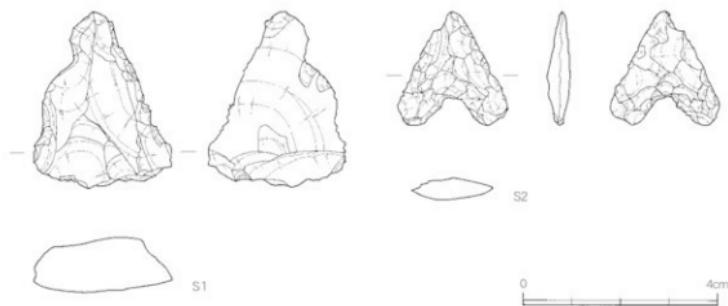


包含層出土土器 1



包含層出土土器2

図版8



出土石器

写 真 図 版



写真図版2

遠景



遺跡遠景（東から）



遺跡遠景（西から）



本発掘調査地点（北東から）



調査前の状況（南西から）



調査前の状況（北東から）



機械掘削

写真図版4

全景



機械掘削（南西から）



調査区全景（南西から）



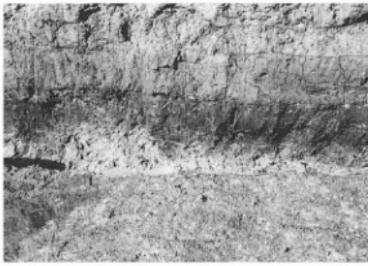
調査区全景（北東から）



水田址（東から）



水田址（北東から）



畦畔土層断面



畦畔検出状況



大畦畔（南西から）

写真図版6

竪穴住居址



SH1 (北から)



SH1 (南東から)



SH1 (南から)



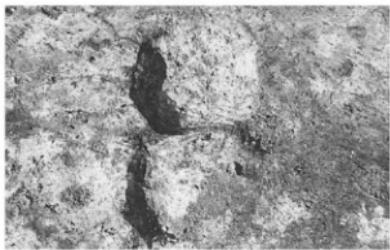
SH1土器出土状況



SH1土器出土状況



SH1台石と壁溝



SH1中央土坑



溝 SD1



調査区 北東端 柱穴



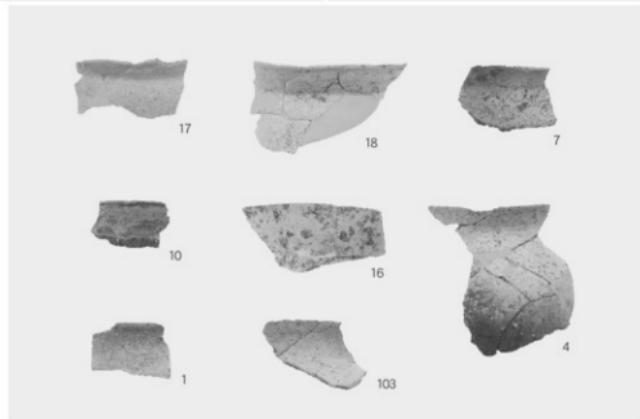
調査区 南東端 包含層

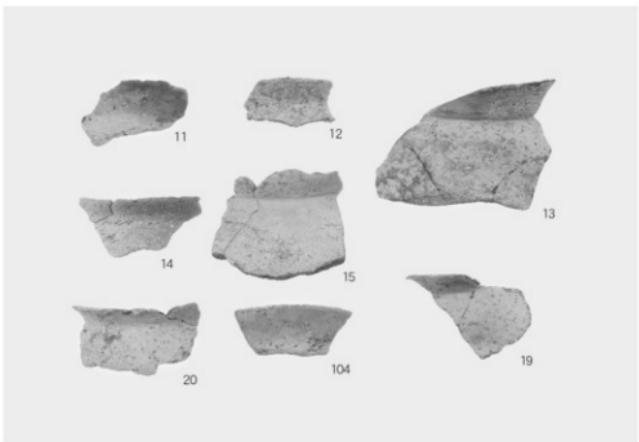


包含層と大畦畔

写真図版8

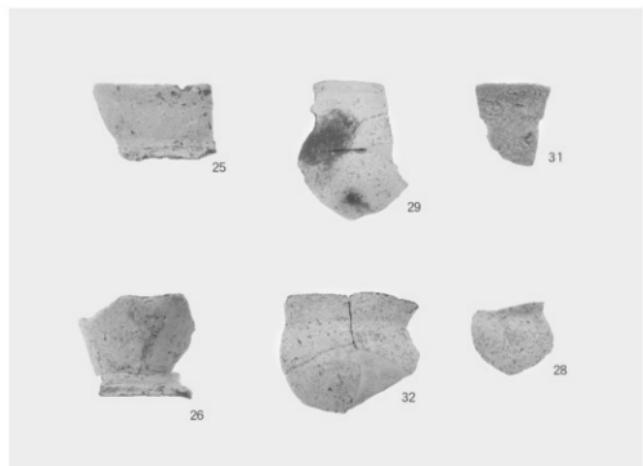
出土遺物
1

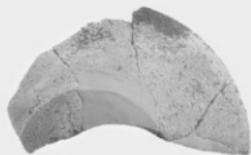
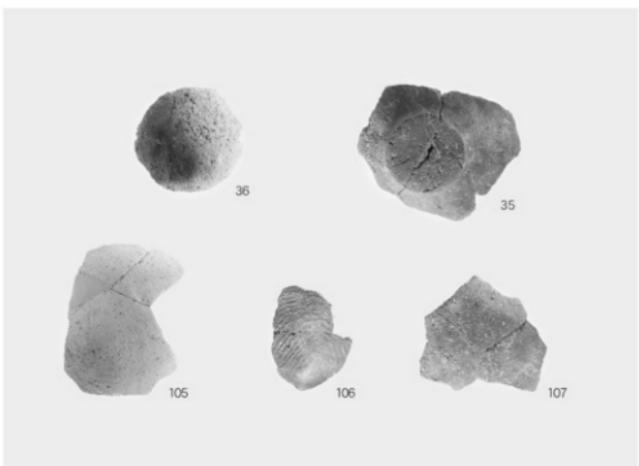




写真図版 10

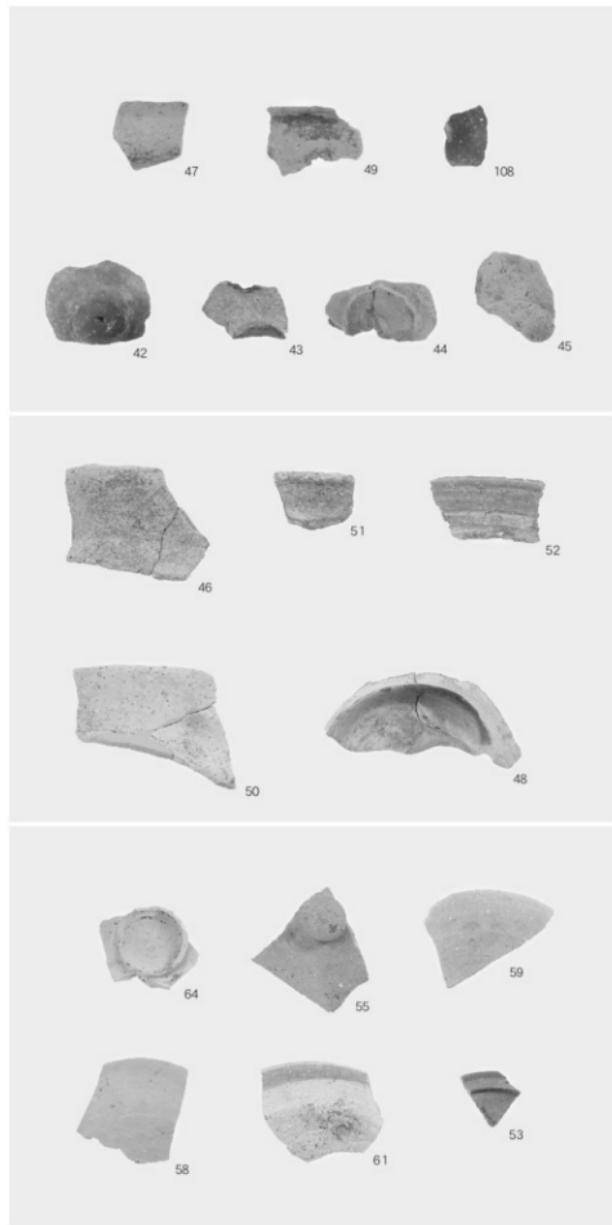
出土遺物 3

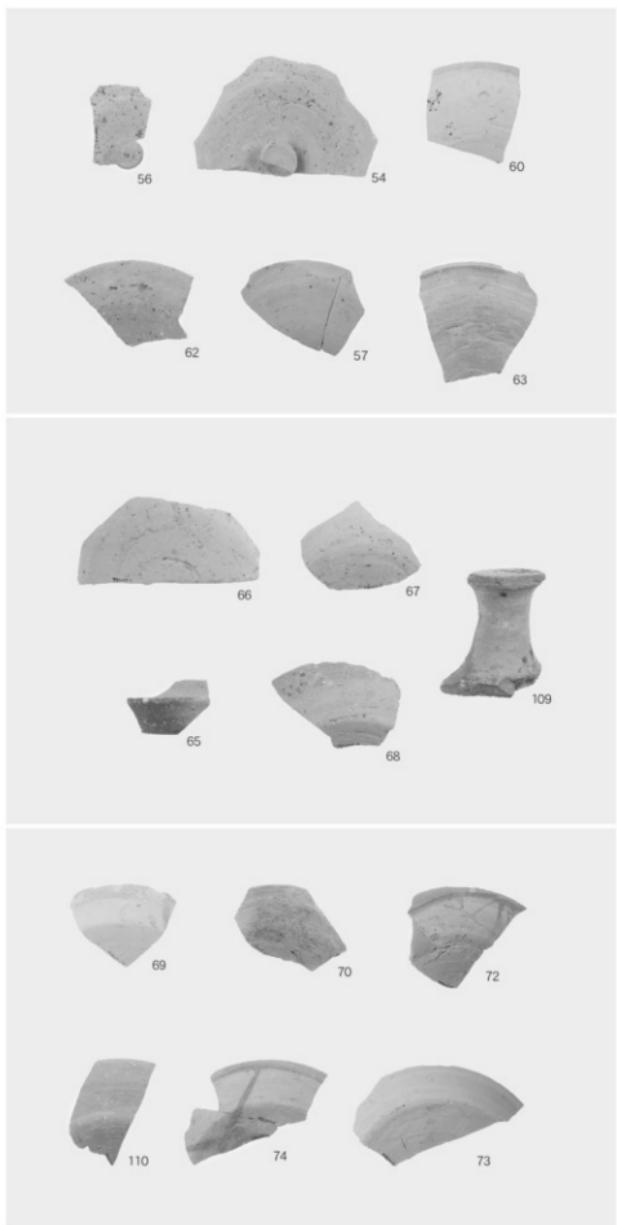




写真図版 12

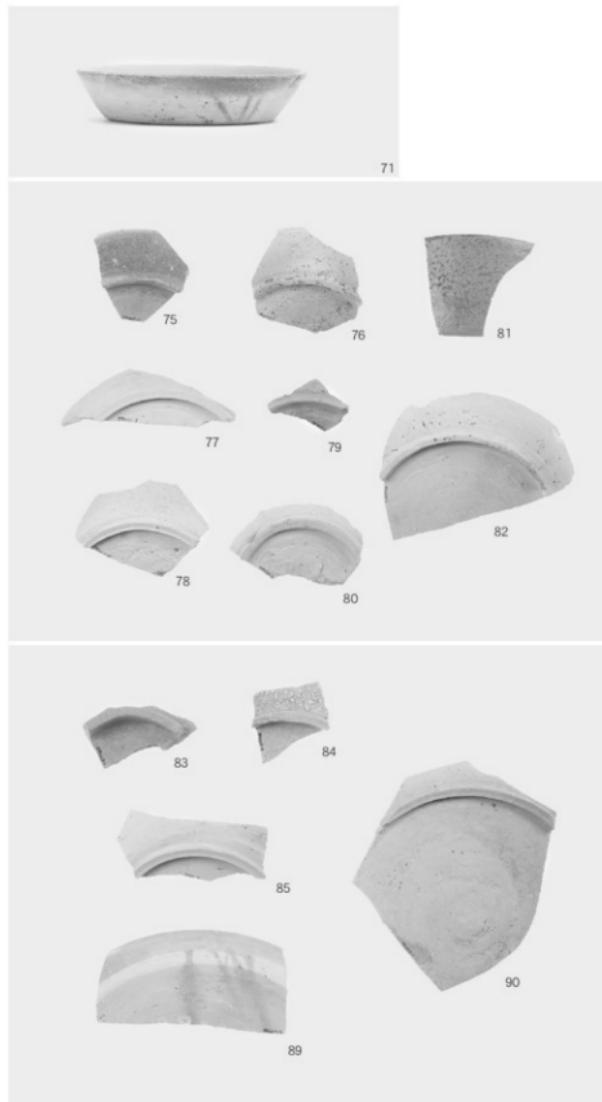
出土遺物5

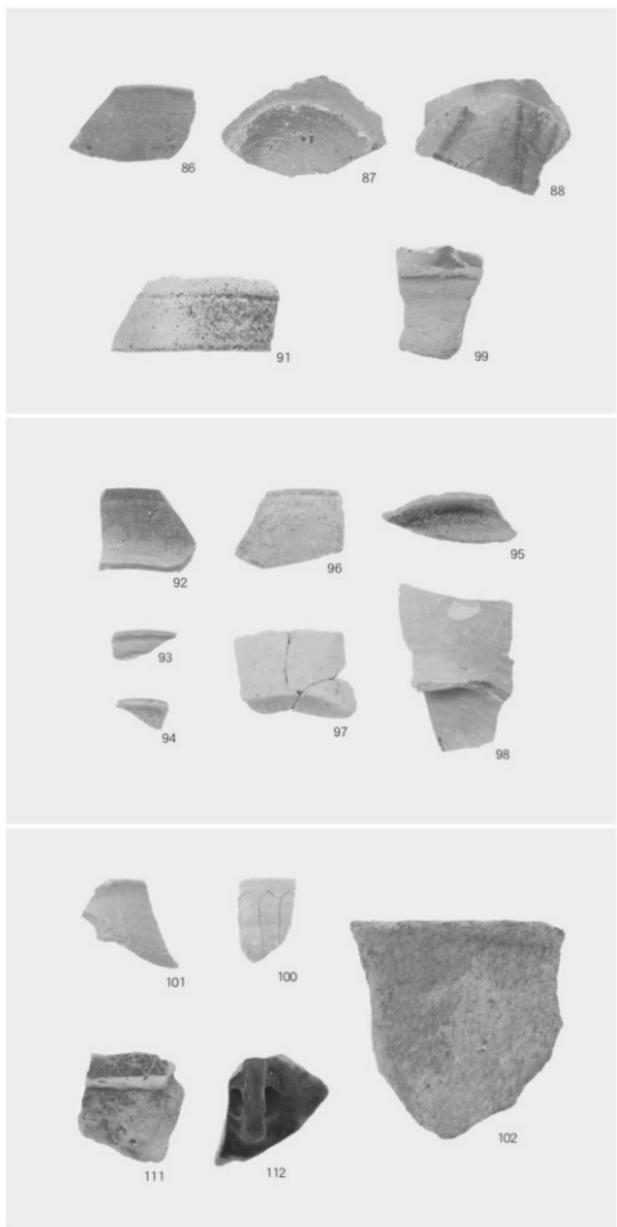




写真図版 14

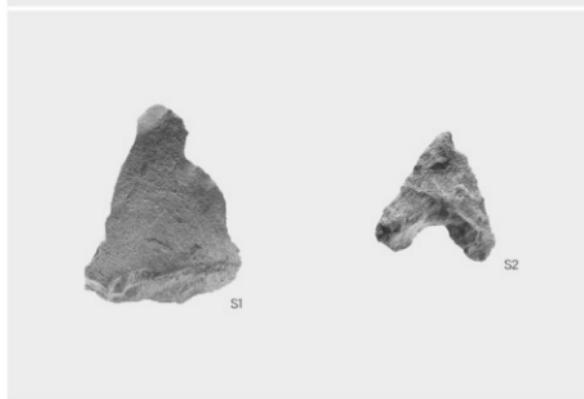
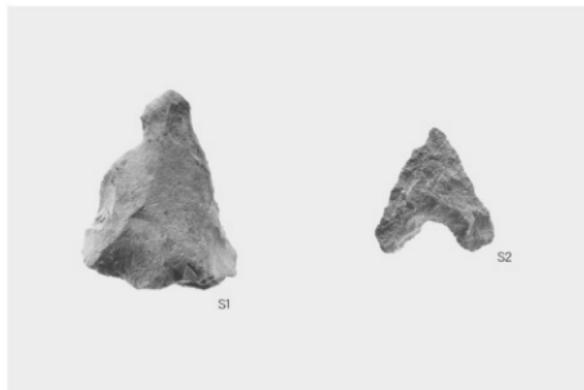
出土遺物 7





写真図版 16

出土遺物9



報告書抄録

ふりがな	ふくすみかまえいせき							
書名	福住構遺跡							
副書名	一般県道山下舗東線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第419冊							
編著者名	別府洋二							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL 079-437-5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL 078-341-7711							
発行年月日	2012(平成24)年3月29日							
(ふりがな) 所収遺跡名	(ふりがな) 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ふくすみかまえ 福住構遺跡	かさいし 加西市 ふくすみかまえ 福住町	市町村	遺跡番号	34度 54分 08秒	134度 48分 44秒	平成11年 10月18日 ~ 28日	175m ²	道路新設工事
遺跡調査番号	990227	確認調査番号 960341 960051						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
福住構遺跡	集落址	弥生時代 後期~ 古墳時代 初期 奈良時代	堅穴住居址 水田址	弥生土器 土器 須恵器 石器				
要約	庄内土器併行期の屋内高床部をもつ堅穴住居址や奈良時代以降の水田址を検出。							

兵庫県文化財調査報告 第419冊

福住構遺跡

一般県道山下舗東線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成24(2012)年3月29日

編集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
TEL 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社ソーエイ
〒673-0898 兵庫県明石市柳屋町6-6